

フィリピン英語留学が日本人学習者の 言語態度に与える影響

羽井佐 昭 彦

相模女子大学紀要 VOL.80 (2016)

フィリピン英語留学が日本人学習者の 言語態度に与える影響

羽井佐 昭 彦

The Influence of Studying English in the Philippines on Japanese Learners' Language Attitudes

Akihiko HAISA

Abstract : There has been a sharp increase in the number of Japanese learners studying English in the Philippines. English programs in the Philippines are attractive to Japanese learners because of their affordability and one-to-one style of instruction. However, another unique feature of these programs has not been fully explored: Communication in English as a Lingua Franca between nonnative speakers of English. This paper investigates how experiences of learning English in the Philippines influence Japanese learners' language attitudes, which have been shown in previous studies to reflect a preference for native speaker varieties of English as their target models. Data were collected from six Japanese learners participating in English programs in the Philippines at three stages—before, during, and after their studies—through written questionnaires and group interviews. A qualitative analysis of the interview data revealed three characteristics: 1) American and British English remained the predominant models for Japanese learners, 2) English used by Filipino teachers is highly appreciated because of its intelligibility, and 3) Japanese learners' perception of incorrect and accented English spoken by Korean learners being acceptable. In order to explain this ambivalence, the author proposes a language attitude model for Japanese learners studying in the Philippines. The model suggests that English as an interlanguage for global communication is acceptable and appreciated as a practical English language learning goal for Japanese learners whereas English as a native language is regarded as the most desired target model that one hopes to attain ultimately in the process of learning English.

Key Words : language attitude, English as a Lingua Franca, ELT in the Philippines

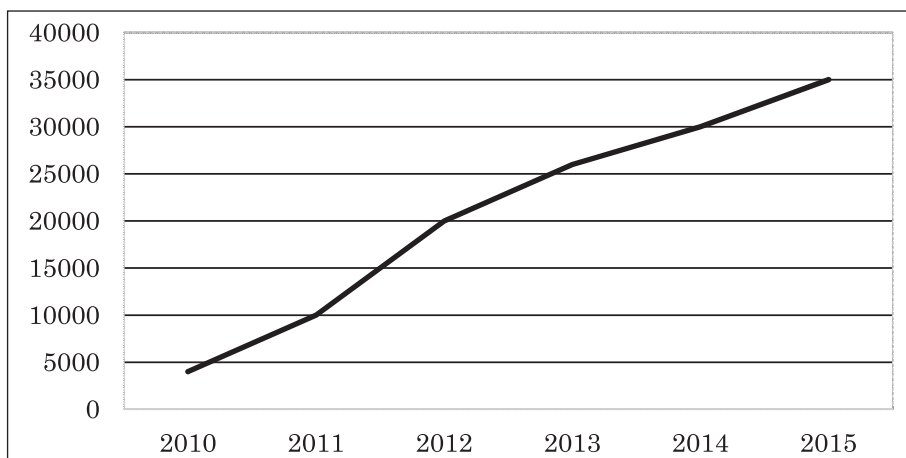
1. はじめに

近年、英語力向上を目指してフィリピンに留学する日本人学習者が急増している。フィリピン政府観光省の推計によるとフィリピンに英語留学をする日本人の数は、2010年におよそ4,000人であったが、2015年には約35,000人と8倍以上の増加を示している（図1）。

フィリピン英語留学の人気は、何と言っても留学費用の安さである。欧米への語学留学に比べ、費用が半額から3分の1程度と言われており、アメリカやイギリス、カナダ等への留学費用は捻出できないが、フィリピン英語留学ならなんとかなるという潜在的な留学希望者にとっては大きな魅力となっている。

フィリピン英語留学のもう1つの魅力は、大学を卒業したフィリピン人講師の高度な英語力に加え、

図1 日本人のフィリピン留学者の推移



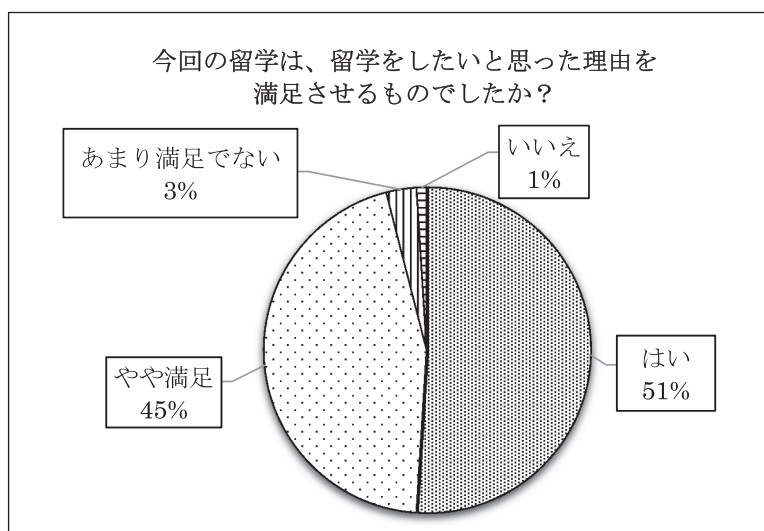
(フィリピン政府観光省、2016)

人件費の安さによって生み出されたマンツーマン教育である。授業の大半がフィリピン人講師との1対1の英語学習という形態を取るため、グループレッスンに比べて学習者の発話時間は圧倒的に多くなる。1対1であるため、ずっと黙っていることは許されず、学習者は英語を使わざるを得ない状況に置かれる。またグループレッスンでは、英語に自信のない日本人学習者はどうしても他人の目を気にして英語使用をためらう傾向がみられるが、マンツーマンの場合には個室であるため、臆せずに英語を使うことができ

るメリットもある（渡辺・羽井佐、2014）。やや古い調査結果だが、2011年のフィリピン政府観光省による「フィリピン英語留学意識調査」(図2)からも満足度が極めて高い留学となっていることがわかる。

安価な留学費用とマンツーマン教育の2つがフィリピン英語留学の大きな魅力であり、ほとんどの留学斡旋業者がセールスポイントとして打ち出しているところであるが、本稿ではフィリピン英語留学のもう1つの側面を提案したい。それは、この留学がアメリカ、イギリス、カナダ等の英語圏への留学と

図2 フィリピン英語留学意識調査



(フィリピン政府観光省、2011)

異なり、学習者が英語母語話者からではなく、英語非母語話者から英語を学ぶという点である。フィリピンでは英語が公用語であるが、フィリピン人講師にとって英語は第二言語であり、学習された言語である。フィリピン英語留学とは、英語母語話者がいない状況のなかで、共通語としての英語（English as a Lingua Franca）を媒介としてなされる英語教育という特殊な留学形態と位置づけられる。

フィリピン留学を希望する学習者は、費用の安さやマンツーマン教育に惹かれて留学を決断するのだが、共通語としての英語を媒介とした英語教育であることを意識して留学する人はほとんどいない。しかし、世界の英語使用の現実を考えると、第二言語あるいは外国語として英語を使用する英語非母語話者のほうが英語母語話者よりもその人数は圧倒的に多く、ビジネス界では英語非母語話者間での英語によるコミュニケーションの重要性は高まる一方である。

本研究では、共通語としての英語使用という観点から、フィリピンでの英語留学経験が日本人学習者の言語態度に与える影響について考察する。

2. フィリピン英語留学について

フィリピン英語留学は、もともとは韓国人がフィリピン人の高度な英語力と安価な人件費に着目し、韓国人の英語力向上のために1990年代中頃に始めたビジネスモデルである。韓国人留学生の需要は着実に伸び、現在ではフィリピン国内に大小合わせて500校以上の英語学校があると言われている。韓国人留学生のマーケットはもはや飽和状態にあり、今は日本人留学生が新たなマーケットとして需要を伸ばしているのが現状である（渡辺・羽井佐、2014）。

英語学校のほとんどが全寮制のシステムを取り、留学生は1～4人部屋のどれかを選んで生活する。食事や洗濯、部屋の掃除なども費用に含まれており、留学生は英語学習のみに集中できる環境が整っている。留学生は多くの場合、日曜に到着し、月曜にオリエンテーションとレベルチェックのテストを受け、火曜から授業に入る。留学期間はまちまちで、1週間だけの短い留学から3～6ヵ月と長期にわたる留学生もいる。授業は小さな個室でフィリピン人講師と留学生が1対1で授業を受けるマンツーマン教育が主体であり、1日の総授業時間数6～8時間のうち4～6時間をマンツーマン教育が占め、2～4時間がグループレッスンとなる。

3. 先行研究

これまでの多くの研究において、日本人英語学習者が英語母語話者の英語をターゲットモデルとしているという傾向が指摘されてきた。例えば、Matsuura et al. (1994)、Chiba et al. (1995)といった、頻繁に引用される早期の研究から現代にいたるまで、日本人英語学習者が英語母語話者の英語、特にアメリカ英語やイギリス英語を規範とするという調査結果を報告した研究は多い。Matsuda (2003)は、日本人の高校生が英語を国際語として認識しつつも、一方で英語が英語母語話者、特にアメリカ人とイギリス人のものとして捉えているとし、英語の国際化にもかかわらず、英語母語話者主義が根強く残っていることを指摘した。またその傾向は、Matsuda (2002)、Yamanaka (2006)、Takagaki (2008)の研究において、日本の検定教科書の英語が主にアメリカ英語またはイギリス英語を規範としていることによる影響が大きいのではないかと指摘もなされている。

またKobayashi (2008)は、本研究の試みと同様に、フィリピンに留学した台湾人大学生の言語態度変容について探求した。その結果、フィリピンでの英語変種との接触を経た後でも、台湾人大学生が英語母語話者の英語を唯一のターゲットモデルとする態度に変化が見られなかったことがわかった。

一方、Hanamoto (2013)の研究においては、英語母語話者の英語変種のみならずされた参加者が英語母語話者の英語を高く評価し、英語母語話者と英語非母語話者の両方の変種にさらされた参加者は英語非母語話者の話す英語に好意的な態度を示す傾向のあることを検証している。この研究は「フィリピン人講師によって話される英語変種に触れることによって日本人英語学習者の英語変種に対する寛容性が増す」という可能性を示唆するものである。

4. フィリピン英語留学参加者への調査

4.1 調査の目的

日本人英語学習者が英語母語話者の英語をターゲットモデルとしていることは多くの先行研究が指摘してきたことである。もしこの言語態度が英語でのコミュニケーションを阻害する要因になっているとしたら、それは大きな問題である。具体的には、英語母語話者のように話さないと格好悪いといった強迫観念が無意識のレベルで存在するとしたら、それは日本人が英語を話す際のハードルを高め、発話抑

制につながる可能性を秘めている。本研究では、その可能性も視野に入れ、「フィリピン英語留学前・留学中・留学後で日本人英語学習者はどのような言語態度を持っているか」、「フィリピン英語留学経験によって日本人英語学習者の言語態度に変容は起こるのか、また起こるとしたら、それはどのようなものか」という2点に着目して調査し、考察を試みる。

4.2 調査対象者と調査方法

調査対象者（本研究の参加者）は、2015年の8月にフィリピンの語学学校で約1か月間の英語研修に参加した留学生で、本研究への協力を得ることができた大学1年生から3年生までの女子大学生6名である。（表1）。参加者“A”のみがオーストラリアでの5か月間の長期語学留学に参加した経験があり、他の5名は長期の留学経験はなかった。

調査方法は、留学前のアンケート調査（筆記）、及び留学前・留学中・留学後の半構造化インタビューにより言語態度の抽出を試みた。インタビューは、2名をグループとして行われた。

留学前インタビューでは、その時点での言語態度を観察するために、主に3つの項目（①フィリピン人講師から英語を学ぶこと、②将来、話せるようになりたい英語のモデル、③現実的に到達したい英語の目標）に焦点を当てて実施した。留学中のインタビューでは、言語態度の変容があるかどうかを見るために、主に3つの項目（①フィリピン人講師の英語、②どの程度英語ができるようになったら満足か、③フィリピン人講師の英語の教え方）について、留学前の考えと実際の経験を比較して語ってもらうことを中心に進めた。留学後も引き続き言語態度の変容という観点から、主に3つの項目（①留学による英語に対する考え方の変化、②どの程度英語ができるようになったら満足か、③フィリピン人講師以外の人たちの英語）に関してインタビューを行った。

本研究では、この研究分野が未開拓であることから

質的アプローチを試み、インタビューでは柱となる質問項目は立てたが、参加者にはできるだけ自由に話してもらい、インタビューの流れのなかで出現する内容を重視した。インタビューデータは転記され、転記データを基に考察を試みた。

5. 結果と考察

参加者による発話の転記データからキーワードとなる項目を拾い上げ、留学前・中・後の言語態度を分析した結果、3つの特徴を抽出することができた。それは、1. 英語母語話者の英語を憧れとして指向する態度、2. フィリピン人講師の話す英語に対する好意的態度、3. 韓国人学生の話す英語に対する肯定的態度、である。

5.1 英語母語話者の英語を憧れとして指向する態度

研究者が以前に実施した聞き取り調査では、フィリピン人の英語に対する言語態度に焦点を当てたため、どの英語をターゲットモデルとするかという点については質問項目に含めていなかった。しかし話の流れのなかで、その点についての明示的・暗示的言及が多くあり、当時の参加者のほとんどが英語母語話者とのコミュニケーションのための準備段階としてフィリピン英語留学を位置付けていたことがわかった（渡辺・羽井佐、2015; 羽井佐、2015）。そこで今回の調査では、その点をより深く掘り下げるために「英語学習のターゲットモデルが何であるのか」といった明示的な質問による言語態度の抽出を試みた。

表2は「将来、話せるようになりたい英語のモデル」についての留学前の結果である。先行研究で指摘されていたように、このインタビュー調査においても参加者全員がアメリカ英語、イギリス英語、あるいはネイティブスピーカーの英語を指向していることが明らかになった。

表1 本研究の参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
学年	3年	1年	3年	2年	2年	2年
期間	5週	4週	5週	4週	4週	4週
留学経験	有	無	無	無	無	無

表2 将来、話せるようになりたい英語のモデル（留学前）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
英語母語話者	○	○	○	○	○	○
アメリカ英語	○	—	○	—	—	○
イギリス英語	—	—	—	○	—	—

表3 「将来、話せるようになりたい英語のモデル」に関する言及（留学前）

参加者	インタビューからの引用
“C”	色々な国の人と話す時により伝わりやすいかなと思うのでアメリカ英語を使いたいです。
“D”	イギリスはやっぱり英語発祥の地っていうイメージがあるから、・・イギリス英語を身に付けてしゃべればいいかな。
“E”	将来的には（ネイティブスピーカーのように）喋れたらいいなって思っている。

表3は「将来、話せるようになりたい英語のモデル」に関する参加者の応答からの引用である。参加者“A”、“F”も“C”と同様で、身近なモデルとしてアメリカ英語を挙げていた。“D”は、発祥の地ということで何となくイギリス英語、“B”は“E”と同様に漠然とネイティブスピーカーのように話したいと述べていた。このように留学前調査では、参加者全員が英語母語話者の英語を憧れのモデルとしているこ

とが明らかになった。

表4は留学中・留学後の「将来、話せるようになりたいモデル」の応答結果である。参加者“E”、“F”の発話には、特にネイティブスピーカー指向の言及は見られなかったが、その他の参加者には依然として、将来的なターゲットとして英語母語話者の英語を指向する態度が確認された。

表5は留学後のインタビューからの引用である。

表4 将来、話せるようになりたい英語のモデル（留学中・後）

参加者		“A”		“B”		“C”		“D”		“E”		“F”	
留学中	留学後	中	後	中	後	中	後	中	後	中	後	中	後
英語母語話者		○	○	○	○	—	○	○	○	—	—	—	—
アメリカ英語		○	—	○	—	—	○	—	○	—	—	—	—
イギリス英語		—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—

表5 「将来、話せるようになりたい英語のモデル」に関する言及（留学後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	常に英語を話すときは意識して、ネイティブを真似するような発音を意識しています。
“D”	行く前はアメリカ英語よりブリティッシュ英語をちゃんと覚えたいと思ってたんですけど、行ってからはイギリスにこだわらなくても伝わるんだったら、アメリカとかでもいいのかなって思いました。

“A”と同様に“B”もネイティブ指向に変化はなく、特にネイティブの発音をしっかり練習しようという意識が高まっていることがわかった。“D”は「伝わることを重視」という点でフィリピン留学後の変容はあったものの、依然としてネイティブの英語をモデルとしていることがわかる。

さて、ここまでのインタビューで「将来」という文言を敢えて使用したのは、「いつか英語母語話者ぐらい話せたらいいなあ」という憧れあるいは願望を述べただけで、頑張っただけで到達しようという現実的な目標とは異なる可能性を考えたからである。そこで本研究では、その点も考慮して、現実的に到達したいゴールについてのコメントも求めてみた。

表6は、留学前のインタビューから抽出された項目である。「きれいな発音で話したい」、「日本語訛りの英語では話したくない」、「自分の言いたいことが言えるようになりたい」、「流暢に話せるようになりたい」という4つの項目が現実的なゴールとして浮かび上がってきた。この4つの項目に関しては、全ての参加者がインタビュー中に言及していたことである。ゴールとしてその方向を目指す、完璧でなくてもよいといったコメントが付加されていたものは△として処理した。

表7は留学前インタビューからの引用である。1つの大きなゴールは「日本語訛りではなく、きれいな発音で話したい」というもので、きれいな発音の

表6 現実的に到達したい英語の目標（留学前）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
きれいな発音で話せるようになりたい	△	○	○	○	○	○
日本語訛りの英語では話したくない	△	○	○	○	△	○
言いたいことが言えるようになりたい	○	○	○	○	○	○
流暢に話せるようになりたい	○	○	△	○	○	○

表7 「現実的に到達したい英語の目標」に関する言及（留学前）

参加者	インタビューからの引用
“A”	日本語英語みたいにはしゃべりたくないですけど、日本人なのでアメリカ人のようには話せないと思うので、日本人が話す英語でもいいかなと。伝わったらいいかな。
“B”	単語力を身につけて、今本当に全然しゃべれないので、少しでも日常会話程度でもいいから、英語が思ったことを口にできるくらいになればいいと思います。
“C”	文法など、日本語に引っ張られることは凄く多いんですけど、発音に関しては絶対日本語寄りにはなりたくないですね。
“D”	どこの国でも通用するというか、普通に聞いてて訛りが入ってないとか、きれいな英語だになってなるような（英語をしゃべれるようになりたい）。
“E”	そこまで完璧に自分がベラベラしゃべれる自信もないし、向こうでずっと暮らすって100パーないので、（日本のアクセントが）ちょっとは残ってもいいんじゃないかなって…100パーなくせられたら全然いいんですけど、今の段階的にはそこまで…
“F”	しゃべるときに文法考えながら話すので、なんも考えないでとっさに話せるようになりたいです。

基準が何なのか明示されなかったものの、英語母語話者の英語を念頭においていることは想像に難くない。ここにも潜在的に根強いネイティブ指向が感じられるが、一方で現実的なゴールとしては「そこまで完璧でなくてもいい」という意識もチラホラ見え隠れしていた。

もう1つの大きなゴールは「流暢に言いたいことが言えるようになりたい」というもので、全ての参加者が目標として言及していたことであるが、こちらでも一方で「そんなにペラペラにはならなくてもいい」、「ゆっくりでも正確に言えれば良い」といった意見も垣間見られた。

ではフィリピン留学中・留学後での現実的目標に

ついてはどのような言及がなされていたかを見てみよう。表8がその結果である。発音に関しては、「日本語訛りで話したくない」というコメントが若干減ったものの、相変わらず「きれいな発音で話したい」という現実的目標は健在であった。参加者“E”の「ノートブックが通じなかったんですよ。さっきソフトクリームも通じなかったし。日本語訛りはダメ」といったコメントにも見られるように、フィリピンで実際に英語が通じなかった経験を自分の日本語訛りの英語に起因すると考えている参加者も散見された。また「流暢に自分の言いたいことが言えるようになりたい」という目標も留学前と同様に全員の参加者が言及していた。

表8 現実的に到達したい英語の目標（留学中・後）

参加者		“A”		“B”		“C”		“D”		“E”		“F”	
留学中	留学後	中	後	中	後	中	後	中	後	中	後	中	後
きれいな発音で話せるようになりたい		△	○	△	○	○	○	○	—	○	—	○	○
日本語訛りの英語では話したくない		△	—	—	—	—	—	○	—	—	○	○	○
言いたいことが言えるようになりたい		○	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○	—
流暢に話せるようになりたい		○	—	○	○	△	—	○	—	○	△	○	—

表9 「現実的に到達したい英語の目標」に関する言及（留学中・後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	一つ一つの発音は正しく言いたいですけど、そういう母国語にしている人の発音も憧れますけど、そこまでは必要ないかな。(留学中)
“B”	ネイティブのように話したいですけど、そこまで話すのに時間どんだけ必要なんだって感じなので、まずは発音とかよりも、ちゃんと自分の考えを英語で話せるようになりたいです。(留学中)
“C”	理想は帰国子女みたいな感じなんですけど…。でも、今の私はそこまでしゃべりたいとは思っていないくて、目標は高く持ちながら、とりあえずはある程度スピードがあって、ボキャブラリーを増やしてわかんない単語を英語で説明できるような…。(留学中)
“D”	私は話できればいいから、聞き返されない程度に。自分が言いたいことが言えて、向こうが言いたいこともわかる (ようになりたい)。(留学中)
“E”	将来英語を使って仕事したいなって思うんですけど、そんなにペラペラしゃべれなくてもなって思います。・・・外国人とか来たときに、自分が対応できるくらいになればいいですね。(留学後)

現実的な目標に関して、留学前と留学中・後ではそれほど大きな意識の変化は見られなかったが、参加者の発話を少し入念に分析してみると、自分の目指す現実的目標について留学前よりもややトーンダウンしていることがわかった。

表9の留学中・留学後のインタビューからの引用に見られるように、留学前に比べ、発音や流暢さは完璧でなくてもよいといった、自分の目標とする英語への寛容的な態度の芽生えを垣間見ることができた。これは、英語母語話者の英語を憧れとして位置づける一方で、フィリピン留学で実際に英語を使う環境に置かれたことで芽生えてきた言語態度変容の兆しと捉えることも可能である。

5.2 フィリピン人講師の英語に対する好意的態度

本調査を通して顕著に表れたもう1つの特徴は、フィリピン人講師の英語に対する好意的態度である。表10は「フィリピン人講師から英語を学ぶことについて」の留学前のインタビューから得られた結果である。6人の参加者全員が、フィリピン人講師の話す英語に不安を抱いていないと回答していた。そもそも不安を抱いていたらフィリピン英語留学には参加していないはずなので予想された結果ではあるが、その理由の引用が表11である。

本研究の参加者がフィリピン人英語講師の英語に不安感を抱かない理由の1つは、オンライン英会話などを通して実際にフィリピン人講師との接点があり、その講師たちの話す英語を知っていたことであった。“A”の他に“B”も同様の理由を挙げていた。

もう1つの理由は、実際にフィリピン英語留学経験者からの肯定的な口コミであった。“E”の他に“D”も“F”も同様の理由でフィリピン人講師の英語に不安を抱いていないことがわかった。

ここで注目すべき点は、英語のターゲットモデルとして強いネイティブ指向を持ちつつも、留学前の段階で既に英語非母語話者の英語に対する寛容性が見られ、それほど抵抗感を持っていなかったという事実である。すなわち、日本人英語学習者がネイティブ指向であることは、これまでの研究で言われてきたことであり、本研究でも確認されたが、フィリピン英語留学を希望する参加者に関しては、多くの研究者が指摘するほど英語母語話者、英語非母語話者の強い区分けやこだわりがないのではないかという可能性も十分に考えられる。

表12は、「フィリピン人講師の英語」について実際にフィリピンに留学してみてどうだったかという留学中のインタビュー結果である。フィリピン人講師の英語は期待通りという意見がほとんどであったが、一方で講師によって訛りがあると指摘した参加者が半数いた。

表13はフィリピン人講師の英語についての留学中の参加者からの引用である。“E”に“C”と“F”を含めた3名が「特に訛りとかあまり感じなかった」と述べていたのに対し、“B”に“A”と“D”を含めた3名が「講師によって強い訛りがある」とコメントしていた。留学前は参加者全員がフィリピン人講師の英語に対して不安を感じていなかったが、実際に現地で様々な講師の英語に触れることで、第二言語とは言

表10 フィリピン人講師から英語を学ぶこと（留学前）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
不安を抱いていない	○	○	○	○	○	○

表11 「フィリピン人講師から英語を学ぶこと」に関する言及（留学前）

参加者	インタビューからの引用
“A”	1年生のときにオンライン授業をやったんですけど、そのとき特に問題なく授業できたので、母国語じゃなくても英語を上手に使っているのだから抵抗はありません。
“E”	去年行った～さんと～さんがいるんですけど、その二人に聞いたりして…、先生の年が近いし若い人が多いから、コミュニケーション取りやすいし、英語がわかりにくいとも聞かなかったし、別に問題ないよって感じだったので。

表12 フィリピン人講師の英語（留学中）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
講師は概ね発音が良い（期待通り）	○	△	○	○	○	○
講師によって訛りの度合いに差がある	○	○	—	○	—	—

表13 「フィリピン人講師の英語」に関する言及（留学中）

参加者	インタビューからの引用
“E”	特に訛りとかあまり感じなかったし、わかりやすかったし、聞き取りやすくゆっくりしゃべってくれました。
“B”	この先生すごい訛りがあるとか、人によってバラバラだなと思って。本当に訛りが強くなって思った先生は変えてしまったんですけど…すごいきれいな先生と、しゃべり方にすごい癖がある先生がいるんだなって気づきました。

え、英語非母語話者の場合は人によってかなり差があることに気づいたようである。

また参加者は、留学中に街中でフィリピン人が話す英語にも触れるのだが、表14はその英語に対するコメント結果、表15はそのコメントの引用である。多くの参加者が「街中のフィリピン人の英語は通じないことが多い」と指摘しており、第二言語圏であっても努力して学習しないとフィリピン人講師のように英語が話せるようにはならないという気づきがあったことも示している。

フィリピン人講師の英語に関しては、インタビュ

ーを通して、その英語の「わかり易さ」を高く評価するコメントが顕著であった。表16は、留学中・留学後のインタビューを通して得られた結果である。参加者全員が「フィリピン人講師の英語はわかり易い」と言及し、その要素として「学習者に合わせてスピードを調整してくれる」と指摘していた。その他の「わかり易さ」の要素として、「発音が良い」と指摘した参加者が4名、「リンキングが少ない」とコメントした参加者が3名、「わかり易い文法の使用」を指摘した参加者が2名いた。

表14 街中のフィリピン人の英語（留学後）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
通じないことも多い	○	—	○	○	○	○

表15 「街中のフィリピン人の英語」に関する言及（留学後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	（現地の人だと）英語しゃべれる人としゃべれない人とか。まったくしゃべれない人もいるんだなって。
“F”	（現地の人は）もっと通じるのかと思いました。発展途上国だから、勉強してる人は通じるけど、そういう環境にいなきゃ話せないんだなって。

表16 フィリピン人講師の英語のわかり易さ（留学中・後）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
英語がわかり易い	○	○	○	○	○	△
スピードの調整	○	○	○	○	○	○
発音が良い	○	○	○	—	—	○
リンキングが少ない	○	—	—	○	○	—
わかり易い文法の使用	○	—	○	—	—	—

表17 「フィリピン人講師の英語のわかり易さ」に関する言及（留学中・後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	単純に単語とかは聞き取りやすいですし、そこまでつなげて言わないので。
“B”	圧倒的にわかりやすい、聞き取りやすく発音してるっていうのはありました…フィリピンの先生はゆっくりしゃべってくれるっていうのあったんで。
“C”	向こうがしゃべるときでも、長い文をあんまり話さないの。そんな難しい文法はあんまり出てこないの…
“E”	わかりやすかったし、聞き取りやすくゆっくりしゃべってくれました…ゆっくり単語単語に区切って教えてくれるっていう印象があります。

表17は参加者からのコメントの引用である。ネイティブ指向を抱きつつ、英語非母語話者であるフィリピン人講師の英語を「わかり易さ」という観点から高く評価するという言語態度があることもわかった。また英語学習という視点から、フィリピン人講師について、“A”は「勉強して英語を話せるようになった為こちらの気持ちをわかってくれる」、「C」は「英語の難しさとかもわかってくれている」と述べ、英語非母語話者であるがゆえのメリットについても言及していた。

さらに表18は、フィリピン人講師の英語を高く評価するコメントであるが、英語母語話者の英語を指向すると同時に、英語非母語話者であるフィリピン人講師の英語も現実的なターゲットモデルとして位置づけられることがわかった。

5.3 韓国人学生の話す英語に対する肯定的態度

3つ目の特徴は、韓国人学生の話す英語に対する肯定的態度である。本研究の参加者は韓国資本の語学学校で学んだため、そこでの学習者の約7割が韓国人、約2割が日本人、残りの約1割が台湾人を含め、その他の国からの学習者となっていた。したがって寮での生活では韓国人学習者と触れ合う機会が極めて多くなるという状況が生まれた。フィリピン人講師の他に、英語非母語話者である韓国人や台湾人と共通語としての英語でコミュニケーションをとる、いわゆるリングフランカとしての英語が使われる状況が整っていた。参加者には韓国人の話す英語についてもインタビューし、表19がその結果、表20が参加者のコメントをまとめたものである。

表19が示す通り、「訛りがある」と言及した参加

表18 「フィリピン人講師の英語に対する肯定的態度」に関する言及（留学中・後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	（フィリピン人講師まで話せるようになったら）、それは最高ですけど。（留学中）
“D”	フィリピンの先生くらいまでしゃべれたらいいなって思いはありますけど。（留学後）

表19 韓国人留学生の英語（留学中・後）

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”
訛りがある	○	—	○	○	○	—
文法の間違が多い	○	○	—	○	○	○
積極的に英語を使う	○	○	○	○	○	○

表20 「韓国人留学生の英語」に関する言及（留学後）

参加者	インタビューからの引用
“A”	韓国人の話す英語は、文法的に間違っているなっているのも多々あったんですけど、そこよりもしゃべれる量とかもすごく多くて単語もいっぱい知ってますし、堂々としているという感じ。
“B”	話す意欲が違って、…韓国の子は文法とかめちゃくちゃだけど、とりあえずは話す。…とりあえず失敗してでもいいから使うことが大事だと思っていました。
“C”	だれがしゃべっても、韓国人がしゃべってるなっている訛りを感じたんですけど、それよりも英語を話すときも次から次へと皆止まらずに話していた。
“D”	韓国人も英語うまくないですよ。文章になってないっていうか。でもそれでも使ってくるから、それでもいいんだってこっちも使わないとなって思ってた。
“E”	でもすごいよくしゃべってるなとは思いますが。…ちょいちょい韓国語訛りみたいなのはあったんですけど、…そこまで話す勇気っていうのか、そういう姿勢は見習わなきゃなと思っていました。
“F”	ちゃんとした英語じゃなくて、単語だけとか。文法の使い方、逆でも、伝わる時あるじゃないですか。そんな感じ。

者が4名、「文法の間違が多い」と述べた参加者が5名、そして参加者全員が「(それにも拘わらず)積極的に英語を使う」と指摘していた。

表20のコメントからもわかるように、韓国人の話す英語の訛りや間違った文法の多さにも拘わらず「堂々と話す」「量をたくさん話す」「止まらずに話す」といった積極的態度に刺激を受け、そうした姿勢や勇気を見習うべきものとして肯定的に捉えていることが伺えた。到達したい現実的な目標として「きれいな発音で話せるようになりたい」という意識が強くあるなかで、韓国人学習者の英語に触れることで、「訛りや文法の間違いを気にしないで話すことの重要性」も同時に認識していたのである。

5.4 考察

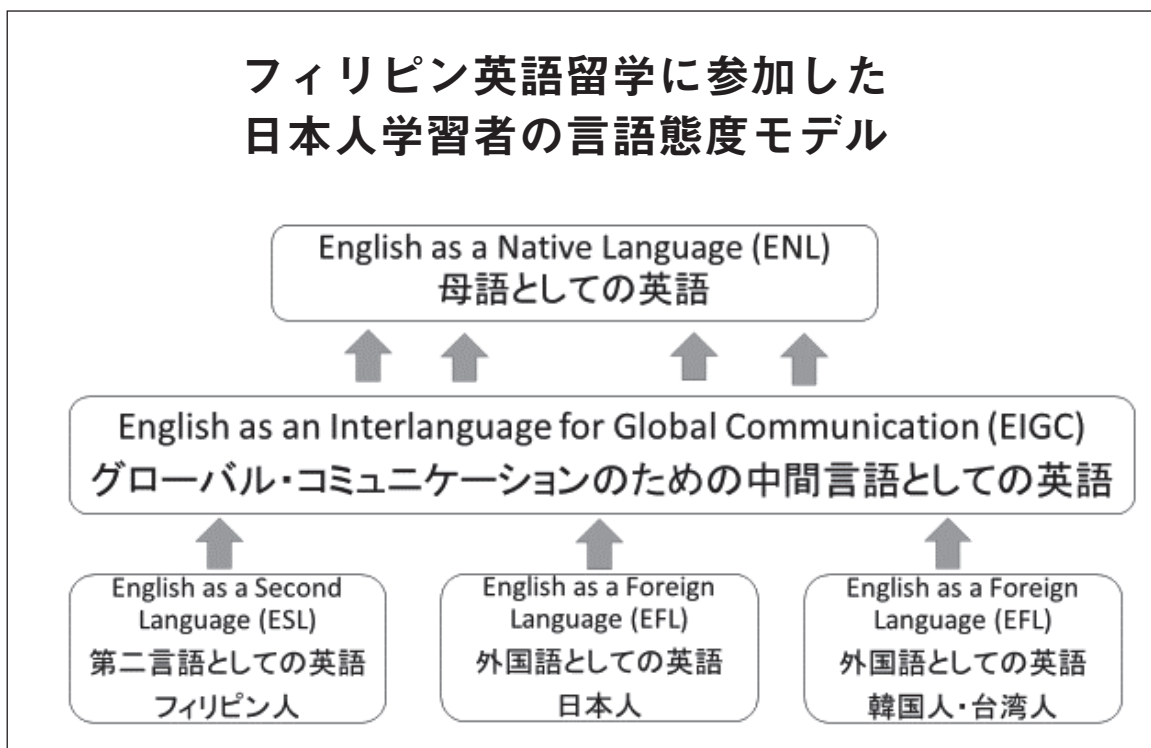
本調査を通して、参加者が英語母語話者の英語に憧れを抱く半面、現実的レベルでは英語非母語話者であるフィリピン人講師の英語でもターゲットモデルになり得ることが確認された。また韓国人との触

れ合いを通して、訛りや間違に対する寛容的態度を育てていたこともわかった。

このように本研究の参加者は留学前・留学中・留学後を通して様々な言語態度を見せていた。ネイティブの発音への憧れを持ちながらもフィリピン人講師の英語に好意的態度を示したり、きれいな発音を指向する一方で訛りや間違いを許容したりするといった二者間の揺れがあり、それをどのように説明したらよいのだろうか。

図3は、この研究の考察から導いた「フィリピン英語留学に参加した日本人学習者の言語態度モデル」である。参加者の長期的願望としては英語母語話者の英語をターゲットモデルとし、現実的に到達したい目標としては、グローバルな場で使えるコミュニケーションのための中間言語であると位置づけた。中間言語とは、母語とも目標言語とも異なるが、言語として独自の体系を持ち、徐々に目標言語の体系に近づきつつある言語とされている(Selinker, 1972)。

図 3



フィリピンの語学学校というグローバルコミュニケーションの場では、第二言語としての英語を話すフィリピン人、外国語としての英語を話す日本人、韓国人、台湾人が混在し、そこでは完璧でなくても、お互いに通じてわかり合える英語を話すことが求められる。中間言語であるため、英語母語話者に近いレベルの人もいれば、たどたどしい英語しか使えない人もいる。そこで大切なことは、それぞれが相対的にわかり合える英語を模索し、歩み寄ろうとする態度であった。この図は、訛りがあるとか文法的間違いがあるといった点も含め、それぞれが発展途上の中間言語を話し、それを許容しようとする態度を示したものである。

このモデルでは英語母語話者の英語を中間言語が目指すターゲットモデルとして位置づけているが、これは英語母語話者、特にアメリカ英語やイギリス英語による英語教材や映画、アクセス可能なネット上のコンテンツが豊富にあり、それが学習者にとって身近で明確な学習モデルとして提供されているという現実を反映したものであると想定した。世界のそれぞれの英語変種を尊重することはとても大切なことではあるが、本調査では学習者の目指すモデル

がある一定の方向性を保っていたために共通語としての英語の機能を果たし、お互いにわかり合える度合いを高めていたことも否めない。

しかし言語に優劣はなく、アメリカ英語やイギリス英語も世界に数多くある様々な英語変種の1つであることを忘れてはならない。それらが歴史的経緯から、また便宜上たまたま目標言語というポジションにあるという認識を共有することが必要である。筆者としては、いつか長い年月を経てグローバルコミュニケーションを円滑にする共通語としての英語のシステムが確立されることを強く願うものである。

本研究では、英語母語話者が介在しない状況を扱い、モデル化したのが、当然のことながらグローバルコミュニケーションの場は英語母語話者を排除するものではない。しかしそのような場では、英語母語話者も、母語としての英語を我が物顔で使うのではなく、そこで使われる「中間言語としての英語」という概念を意識化し、その場に歩み寄り、相手に応じてわかり合える英語を使おうとする態度を持つことが求められるのではないだろうか。

6. おわりに

2013年から2014年にかけての調査では、英語母語話者の英語をターゲットモデルとする態度について深く掘り下げた質問をせず、それが単なる願望なのか、目指すべき現実的な目標なのかは定かではなかった。そこで本研究ではフィリピン英語留学に参加した日本人学習者の心理的な側面の探究も試みた。その結果、英語母語話者の英語を憧れ、あるいは究極的には到達したい長期的願望と位置づける一方で、現実的なターゲットとしては、グローバルな場面で使える中間言語としての英語を指向していることがわかった。発音についても、通じない日本語訛りの英語は嫌でも、通じるのであれば若干訛りや間違いがあっても許容する態度を持ち合わせていたこともわかった。

このような英語非母語話者の英語に対する寛容的態度を持つことは、日本人学習者の英語コミュニケーション能力を育成するうえでとても重要だと考える。文部科学省は、平成21年3月告示の高等学校学習指導要領（外国語）で「授業は英語で行うことを基本とする」と明記した。次期学習指導要領では英語による英語の授業が中学校においても適用されることが決まっている。この方針には賛否両論があるものの、今後英語で英語の授業を行うことが日本の英語教師たちに求められるのは確かである。しかし高校の教育現場では、「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」での指導の5割以上が日本語であるとする教師が52～55%を占め、多くの教師が英語を使って授業できていないのが実情である（文部科学省、2016）。

日本の教室で英語を使って授業をするということは、日本語が共通の母語ではあるが、英語非母語話者間で英語を使用することになる。この状況で生徒たちが英語母語話者の英語をモデルとする意識を持ち続けたら、多くの日本人英語教師は萎縮して教壇で英語を使うことなどできなくなるだろう。文部科学省の方針を具現化するには、教師も生徒も「中間言語としての英語を許容し、ネイティブのように英語が話せなくても、お互いに通じ合えるレベルのわかり易い英語を使うことが大事だ」という共通認識を持つことが必要だと考える。そうした意識改革を進めない限り、文部科学省の方針は机上の空論となってしまうのではないだろうか。

本稿では、フィリピン英語留学を英語非母語話者間で行われる英語教育と位置づけ、質的研究の視点

から考察を試みた。その結果は日本の英語教育改善に向けても多くの示唆を与えてくれるものであった。本研究の次のステップでは、フィリピン人講師と日本人留学生のインタラクションに焦点を当て、そこの英語使用の分析を試みたいと考えている。

※本稿は、2015～2017年度科学研究費補助金（基盤研究（C））『フィリピン英語留学における教室内談話の分析：共通語としての英語使用の観点から』（課題番号15K02767）の助成を受けた研究成果の一部であり、グローバル人材育成教育学会第2回中国四国支部大会（2016年10月22日、於四国学院大学）での口頭発表をもとに加筆・再構成したものである。

※調査に協力いただいた本研究参加者の皆さまに心より感謝申し上げます。

参考文献

- Chiba, R., Matsuura, H. and Yamamoto, A. (1995). Japanese attitude toward English accents. *World Englishes* 14, 77-86.
- Haisa, A. and Watanabe, Y. (2014). Language Attitudes of Japanese Learners Who Are Planning to Study English in the Philippines. *The Journal of Sagami Women's University (Humanities)*, Vol. 77A, 1-7.
- Hanamoto, H. (2013). How does the experience of exposure to non-native English varieties relate to learners' language attitudes toward EIL?: A mixed quantitative and qualitative study of Japanese students of science and engineering. *Asian English Studies*, 15, 125-139.
- Kobayashi, I. (2008). "They speak 'incorrect' English": Understanding Taiwanese learners' views on L2 varieties of English. *Philippine Journal of Linguistics*, 39, 81-98.
- Matsuda, A. (2002). Representation of users and uses of English in beginning Japanese EFL textbooks. *JALT Journal* 24 (2), 182-200.
- Matsuda, A. (2003). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22 (4), 483-496.
- Matsuura, H., Chiba, R., and Yamamoto, A. (1994).

- Japanese college students' attitudes towards non-native varieties of English. In D. Graddol and J. Swann (Eds.), *Evaluating language* (pp.52-61). Clevedon: Multilingual Matters.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL*, 10, 209-239.
- Takagaki, T. (2008). Teaching English as an international language and senior high school English textbooks in Japan. *Asian English Studies*, 10, 83-97.
- Yamanaka, N. (2006). An evaluation of English textbooks in Japan from the viewpoint of nations in the Inner, Outer, Expanding circles. *JALT Journal*, 28 (1), 57-76.
- 羽井佐昭彦 (2015).「フィリピンに英語留学する日本人の言語態度に関する一考察」*日本大学経済学部研究紀要*, 第77号, 15-30.
- 文部科学省 (2009).「高等学校学習指導要領」*東山書房*.
- 文部科学省 (2010).「高等学校学習指導要領解説：外国語編, 英語編」*開隆堂出版*.
- 文部科学省 (2016).「平成27年度公立中学校・中等教育学校（後期課程）における英語教育実施状況調査の結果」
- 渡辺幸倫・羽井佐昭彦 (2014).「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビューを手掛かりに」*相模女子大学文化研究* 第32号, 47-66.
- 渡辺幸倫・羽井佐昭彦 (2015).「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに」*相模女子大学文化研究* 第33号, 27-37.